【学会レヴュー】

日本イェイツ協会　第50回大会

（早稲田大学，2014年11月8日～11月9日）

海老澤　邦江

早稲田大学（戸山キャンパス）に於いて，11月8日（土）～9日（日）に日本イェイツ協会第50回大会が開催された。日本イェイツ協会は，ノーベル文学賞を受賞したアイルランドの詩人および劇作家であるW. B. イェイツ研究を中心に，その周辺の文学・文化研究を含め，現代のイギリス／アイルランド研究の進展に貢献している学術研究団体のひとつである。創立から50年を経た現在も150名に及ぶ会員を持ち，個人名を冠した文学研究の学会としては日本で最も古い学会のひとつとして考えられている。

2014年度は，1964年に日本イェイツ協会設立委員会が発足してから，半世紀を迎える記念大会となった。日本におけるイェイツ研究の先鞭をつけイギリス・ロマン派を初めイェイツに関する数々の優れた業績を残した故尾島庄太郎博士を初代会長とし，当時の英文学会の主だった研究者たちが集い，第1回大会を開催したのが早稲田大学であった。それに敬意を表し，第50回大会を早稲田大学で開催することとなった。

プログラム構成は，初日には，基調講演，研究発表2本，シンポジウム，2日目には，研究発表3本，ワークショップとなっている。

初日8日（土）の開会の挨拶には，駐日アイルランド大使のAnne Barrington氏が，公務多忙の折りにもかかわらず，会場に足を運ばれ協会設立50周年の祝辞を述べていただいた。大使からは，「これまでの日本イェイツ協会の活動が，日本とアイルランドの学術的交流に大きな役割を果たしてきたことは本国アイルランドにおいても，広く認識されており，多くの日本の研究者がイェイツ研究に真剣に取り組んでいることに感銘を受けている。また本国アイルランドにおいてもイェイツ研究の新たな高まりと再評価の機運があり，広がりつつあるイェイツ研究を通じ日本・アイルランド両国ならびに他の諸外国との交流が促進されるよう，これからの進展を期待すると同時に今後も協力し合い友好的な関係が深められるよう望む。これまでの日本イェイツ協会の貢献に感謝するとともに，活発な学術活動と今後の隆盛をお祈りする」という祝辞をいただいた。

基調講演は，松村賢一氏（中央大学名誉教授）がこれまでの50年の歩みをたどった後，「海の変容―イェイツのビサンツ詩篇をめぐって」と題し，地中海文明ならびに世界文学の視座からイェイツの作品をどうとらえるかというテーマで講演があった。その後，奥田良二氏（東海大学教授）と伊達恵理氏（明治大学非常勤講師）による研究発表。それぞれ活発な質疑応答が交わされた。そして，萩原眞一氏（慶應義塾大学教授）の司会・構成によるシンポジウム「イェイツとソポクレス」が続いた。パネリストとして伊達直之氏（青山学院大学教授）と三好みゆき氏［中央大学教授］，ならびにゲストパネリストとして，ギリシア古典学者の西村太良氏（慶應義塾大学）をお招き，イェイツの劇作および詩に援用されたギリシア古典理解について，文学，時代思潮ならびに文献学的視点から活発なディスカッションが行われた。

2015年1月21日受付
* 江戸川大学 情報文化学科教授　英詩，文化比較

翌2日目の午前中に柿原妙子氏（東京大学大学院生），星野恵里子氏（沖縄高専教授），石川隆士氏（琉球大学教授）による研究発表があった。午後には，栩木伸明氏（早稲田大学教授）の司会・構成によるワークショップ「イェイツ再読―＜世界文学＞として」があった。パネリストとして，眞鍋晶子氏（滋賀大学教授），ゲストパネリストとして現代詩人の武子和幸氏と杉本徹氏をお迎えした。イェイツは，長い時を経てもなお，そのイェイツ理解は固定化から逃れ絶えず新しい解釈が提示され続けている。また，イェイツは，研究者のみならず日本の創作者たちにも大きな影響を与えてきた。今回は，実作者側がどのようにイェイツを解釈し，さらに自作への影響がどのような形で表れているのか，研究者側の解釈とどのような差異が認められるかなどが話し合われた。実作者をゲストとして招聘した試みは，大変評価され，文学研究が専門家の中だけでなされるだけでなく，外に開き他分野の研究者や文学者を含めた研究活動をさらに期待する声が多く寄せられた。

大会両日を通じて，会員のみならず会員外からの参加が多かった。例年のことであるが，フロアからの質疑応答やディスカッションが熱を帯び，時間内に収まりきれず情報交換会の場においても，議論が所々で交わされていた。閉会の辞においては，2015年度はイェイツ生誕150周年を迎え，さらに昨年，国際イェイツ協会が発足した。イェイツ生誕150周年を記念し，本格的に本国アイルランドのリメリック大学において第1回国際イェイツ協会の大会が開催されることになったこともあわせて，さらに今後のイェイツ研究の発展を願い盛会の内に終了した。